

半七捕物帳

人形使い

岡本綺堂

青空文庫

「年代はたしかに覚えていませんが、あやつり芝居が猿若町から神田の筋違すじかい外そとの加賀ツ原へ引き移る少し前だと思つています

から、なんでも安政の末年でしたらう」と、半七老人は云つた。

「座元は結城ゆうきだか薩摩さつまだか忘れてしまいましたが、湯島天神の境け内ないで、あやつり人形芝居を興行したことがありました。なに、

その座元には別に関係のないことなんですが、その一座の人形使いのあいだに少し変なことが出しゅつ来たいしたんです。今いま時どきこんなことをまじめで申し上げると、なんだか嘘らしいように思おぼ召しめす

かも知れませんが、まったく実録なんですからその積りで聴いてください。その人形使いのうちに若竹紋作と吉田冠蔵というのがありました。紋作はその頃二十三、冠蔵は二十八で、どっちも同じ江戸者でした。ああいう稼業にはかみがた上方者が多いなかで、どっちもきつすい生粋の江戸っ子でしたから、自然おたがいの気が合つて、兄弟も同様に仲がよかつたんですが、それが妙なことから仇同士のような不仲になつてしまつて、一つ楽屋にいても碌々に口も利かないほどになつたんです」

二人が不仲になつた原因はこうであつた。あやつり芝居が夏休みのあいだに、二人が一座を組んで信州路へ旅興行に出て、中仙道の諏訪から松本の城下へまわつて、その土地の或る芝居小屋の

初日をあげたのは、盂蘭盆うらぼんの二日前であつた。狂言は二日ふつかがわりで、はじめの二日は盆前のために景気もあまり思わしくなかつたが、二の替りからは盆やすみで木戸止めという大入りを占めた。その替りの外題げだいは「優曇華浮木亀山」の通しで、切きりに「本朝廿四孝」の十種香から狐きつねび火をつけた。通し狂言の「浮木亀山」は、いうまでもなく石井兄弟の仇討で、紋作は石井兵助をつかい、冠蔵はかたきの赤堀水右衛門を使つていた。

その初日の夜である。芝居の閉はねたのはもう九ツ（夜の十二時）をすぎた頃で、一座のものは楽屋に枕をならべて寝た。田舎の小屋の楽屋ではあるが、座頭ざがしら格の役者を入れる四畳半の部屋があつて、仲のいい紋作と冠蔵とはその部屋を占領して一つ蚊帳かやのな

かに眠った。疲れ切っている二人は木枕に頭を乗せるとすぐに高
いびきで寝付いてしまったが、およそ一いつとき晌も経つかと思うころ
に紋作はふと眼をさました。建て付けの悪いひじか脇掛け窓の戸を洩れ
て、冷たい夜風が枕もとの破れた行あんどう燈の灯をちろちろと揺らめ
かせている。信州の秋は早いので、壁にはこおろぎの音が切れぎ
れにきこえる。紋作は云いしれない旅のあわれを誘い出されて、
遠い江戸のことなどを懐かしく思い出した。自分たちを置き去り
にして土地の廓くるわへ浮かれ込んだ一座の或る者を羨ましくも思った。
木枕に押しつけていた耳が痛むので、かれは頭をあげて匍匐はらばい
ながら、枕もとの煙草入れを引きよせて先ず一服すおうとすると
きに、部屋の外の廊下で微かにかちりかちりという音がきこえた。

紋作は鼠であろうと思つて、はじめはそのまま聞き流していたが、やがて俄かに気がついた。せまい廊下には衣裳葛籠つづらや人形のたぐいが押し合うようにごたごたと積みならべてある。疲れている一座のものは碌々にそれを片付けないでほうり出しているに相違ない。その何かを鼠に咬かじられでもしてはならないと思ひ付いて、かれは煙管きせるを手にしたまま蚊帳の外へくぐつて出ると、物の触れ合うような小さい響きはまだ歇やまなかつた。

そのひびきを耳に澄ましながら、紋作はそつと出入り口の障子をあげると、かなり広い楽屋のうちにたつた一つ微かにともつてゐる掛け行燈のうす暗い光りで、あたりは陰くもつたようにぼんやりと見えた。そのうす暗いなかに更にうす暗い二つの影が、まぼろ

しのように浮き出ししているのを見つけた時に、紋作は急に寝ぼけ眼をこすつた。ふたつの影は石井兵助と赤堀水右衛門との人形で、それが小道具の刀を持って今や必死に斬り結んでいるのであつた。その鬪いは金谷宿佗住居の段で、兵助が返り討ちに逢うところであるらしくみえた。非情の人形にも仇同士の魂がおのずと籠つたのであろうか。余りの不思議に気を奪われながらも、紋作は夢のように浄瑠璃を低く唄い出した。

さしにも猛き兵助が、切れども突けどもひるまぬ悪党、前後左右に斬りむすぶ、数力所の疵にながるる血潮、やいばを杖によろばいながら、ええ口惜しや——。

兵助の人形は文句通りに斬り立てられて、勝ち誇つた敵は嵩にかさ

かかって斬り込んできた。舞台の上の約束はともかくも、ここでは自分の人形を返り討ちにさせたくないの、紋作はわれを忘れて廊下へ駆け出して、手に持っている煙管をふり上げて仇の人形を力まかせに打ち据えると、水右衛門は額の真向ひたい まっこうをゆがませてばったり倒れた。兵助の人形も疲れたように同じく倒れてしまった。

この物音に眼をさました冠蔵は、自分のとなりに紋作の寝ていないのを怪しんで、これも蚊帳をくぐって出てみると、紋作は煙管をにぎって果し眼はたまなこで突っ立っていた。その足もとには水右衛門の人形がころげていた。

「おい、紋作。どうした」

紋作は夢から醒めたように、自分の今みた人形の不思議な話をしたが、冠蔵は信用しなかった。いくら仇同士であろうとも、操^{あやつ}りの人形に魂がはいって、敵と味方とが夜なかに斬り結ぶなぞという、そんな不思議が世にあらう筈がない。大方お前の寝ぼけ眼でなにかを見ちがえたのであらうと、冠蔵も始めのうちは唯わらっていたが、水右衛門の人形の額にゆがんだ打ち疵のあとを見つけると、彼は顔の色を変えた。自分の使っている人形の顔へ、なんの遺恨でこんな大疵をつけたのかと彼は紋作にはげしく食ってかかった。自分の人形が可愛さに、思わずその仇を手にかけたと紋作はしきりに云い訳をしたが、冠蔵はなかなか得^{とくしん}心しなかつた。

人形同士が斬り合ったという。いや、そんな筈がないという。
所詮しよせんは双方が水掛け論で、ほかに証人がない以上、とても決着
が付きそうもなかった。このもんぢやく 著もんぢやくにおどろかされて、ほかの
者もだんだんに起きてきたが、この奇怪な出来事について正当の
判断をくだし得るものは一人もなかった。ある者はそんな不思議
がないとも限らないと云った。ある者は頭から馬鹿にしてその不
思議を絶対に否認した。しかも紋作が水右衛門を打ったのは事実
で、人形の額にたしかな証拠が残っていた。

冠蔵はそれ对自己に対する紋作の嫉妬であると解釈した。初日
以来、自分の人形の評判がよい。まるで生きているように働くと
観客がみな褒めそやしている。紋作はそれを妬ねたんで、夜なかにそ

つと自分の人形を傷つけて、それを誤魔化すために途方もない怪談を作り出したに相違ないと認めた。しかし此れも取り留めた証拠はないので、彼もその場は胸をさすつて人々の仲裁にまかせた。なにぶんにも旅先のことと直ぐに付けかえる首がないので、冠蔵は額のゆがんだ水右衛門の人形を今夜も舞台へ持ち出すよりほかなかつた。うす暗い蠟燭の火で観客はそれを覚さとつたかどうだか知らないが、向う疵を負つた人形を使っているということは何分にも気が咎めて、冠蔵はどうも気乗りがしなかつた。それでも金谷宿佗住居の段に進んで来ると、云いしれない敵愾てきがいしん心が胸いつぱいに漲みなぎつて来て、かれの眼には残忍の殺気を帯びた。

赤堀水右衛門は石井兵助をあざむいて、だまし討ちにするので

ある。冠蔵はその仇になりすましてしまつて、出来るかぎり憎々しく、出来る限り残酷に、相手の兵助をなぶり殺しにしてやろうと思つて、その人形を手いっぱい働かせた。相手の気込みがいつもと違つているのは、紋作の方にも悟られた。もともと旅興行で、さのみ熱心に勤めている筈でない冠蔵の人形が、今夜はたましいが籠つたように生きて働いている。しかもその人形を使つている冠蔵の眼には殺気を帯びている。紋作はなんだか油断が出来なくなつて、自分の人形をなぶり殺しにしようと立ちむかつて来る敵に対して、十分の身がまえをしなければならなくなつた。人形と人形との刀は折れそうに激しく打ち合つた。人形つかいの額には汗がにじみ出した。二人の眼はおのずと血走つて来た。それ

に釣り込まれて、床ゆかの太夫も今夜は一生懸命に語った。観客は呼吸いきをのんで、その勝負の成り行きをうかがっていた。

いかにあせつても狂つても、当然の約束として、石井兵助は、

敵に斬り伏せられなければならなかった。水右衛門の方には助太刀の敵かたきやく役があらわれて来た。これらの人形も三方から兵助を

取り囲んで斬り込んでくるので、それを使っている紋作は自分が敵に囲まれているように焦躁いらだつてきた。神経の興奮している彼は、

浄瑠璃の文句にもかまわずに前後左右を滅多めったやたら斬りまくった。

兵助の刀は又もや水右衛門の真向まっこうを打った。冠蔵の方でも約束

が違ちがうのを咎とがめているような余裕はなかった。なんでも相手の人形を残酷に斬り伏せてしまわなければならないという一心で、無

二無三に兵助を斬った。敵も味方も滅茶苦茶な立ち廻りのうちに、浄瑠璃の文句は終りを告げた。

「今夜のは、ありやあなんだ」

楽屋へはいると、冠蔵はすぐに紋作を責めた。紋作の方でも冠蔵の使い方がいつもとは違っていると云って、さかねじに食つてかかった。ゆうべの喧嘩が再びここで繰り返されそうになつたのを、ほかのものどもが仲裁して今夜も無事に納めたが、その次の幕の済むあいだに兵助の人形の首は何者にか引き抜かれて、楽屋の廊下に投げ出されていた。無論に冠蔵の仕業であろうとは思つたが、その手証てしやうを見とどけたわけでもないのです、紋作はじつと堪こらえてなんにも云わなかつた。勿論、どの人形も自分のものでは

ない。冠蔵も紋作も自分の人形をもっているほどの立派な人形使
いではなかった。しかし自分がそれを扱っている以上、その人形
の首をひき抜いて廊下に投げ出されたということは、自分の首を
引き抜かれたように紋作はくやく感じた。彼はその以来、殆ど
冠蔵と口をきかなくなった。冠蔵の方でも彼を相手にしなくなっ
た。かれらは実際に於いても、赤堀水右衛門と石井兵助とになっ
てしまった。

江戸へ帰った後も、彼等はむかしの親しい友達にはなれなかつ
た。同じ商売でおなじ楽屋の飯を食っていないながらも、水右衛門と
兵助とは所詮かたき同士たるを免かれなかった。

「紋作さん。なんだかいやに時雨しぐれて来ましたね」

十七八の色白の娘が結い立ての島田を見てくれというように、若い人形使いのまえに突き出した。紋作はまだ独身者ひとりもので、下谷の五条天神から遠くない横町の、小さい小間物屋の二階に住んでいるのであった。

その小間物屋から四、五軒さきあやつきに、踊りや茶番の衣裳の損料貸しをする家があつて、そこで操りの衣裳の仕立てや縫い直しなどを請け負おっていた。小間物屋の娘お浜も手内職にその仕事を手伝いに行っているので、そんな係り合いから紋作とも自然に心安

くなつて、お浜の母も承知のうえで自分の二階を彼に貸すことになつたのであつた。お浜の家では四年ほど前に主人をうしなつて、今では後家のお直なほと娘との二人暮らしである。そこへ転がり込んだ紋作は年も若い、芸人だけに垢抜けもしている。したがって近所では彼とお浜とのあいだに、いろいろの噂を立てる者もあつたが、母のお直がなんにも聞かない振りをしているのを見ると、ゆくゆくは娘の婿にする料簡であろうなどと、早合点にきめている者もあつた。いづれにしても、お浜と紋作とは仲がよかつた。

紋作はすこし風邪かぜをひいたといふので、小さい長火鉢をまえにして、お浜にこの冬新らしく仕立てて貰つた柔らかい広袖を羽織つて坐っていた。かれは瘦形すこしのすこし瘡持ちらしい、見るからに

弱々しい男で、うす化粧でもしているかと思われるように、その若い顔を綺麗に光らせていた。お浜はその長火鉢の向うから彼の少し皺しわめている眉のあたりを不安らしくながめた。

「ほんとうに気分が悪いの。振出しでも買って来てあげましょうか」

「なに、それ程でもないのさ」と、紋作は軽く笑った。

「でも、きょうもまた稽古を休むんでしよう。阿母おつかさんがさつきそんなことを云っていました」

「なにしろ、頭が重いから」と、紋作は気のないように云った。

「だからお薬をおのみなさいよ。初日前にどつと悪くなると大変だわ」

「悪くなれば休む分ぶんのことさ。今度の芝居はあまり気が進まないんだから、どうでもいい。いつそ休む方がいいかも知れない」

十一月の末の時雨しぐれかかった空はまた俄かに薄明るくなつて、二階の窓の障子に鳥のかげが映つた。お浜は長火鉢に炭をつぎながら呟いた。

「おや、鳥影が……。誰か来るかしら」

「誰か来るといえば、芝居の方から誰も来なかつたかしら」

「いいえ、きようはまだ誰も……。」と、お浜は丁寧ていねいに炭をつみながら答えた。「定さださんの話に、おまえさんは今度は役不足やくふそくだというじゃありませんか」

「役不足という訳じゃあない」と、紋作は膝ひざの前の煙管きせるをひき寄

せた。「旅へ出てならともかくも、江戸の芝居で、わたしに判官と弥五郎を使わせてくれる。役不足どころか、有難い位のものさ。だが、どうも気が乗らない。今もいう通り、今度の芝居はいつそ休もうかとも思っているんだ」

「なぜ」と、お浜は火箸を灰につき刺しながら向き直った。「あたし、おまえさんの判官がみたいわ。出使いでしよう」

「無論さ。だが、師もろのお直が気に入くわない。こつちが判官で、あいつに窘いじめられるかと思うと忌いやになる」

今度の狂言は「忠臣蔵」の通しで、師直と本蔵を使うのはかの吉田冠蔵であった。かたき同士の冠蔵を相手にして、三段目の喧嘩場をつかうのは紋作として面白くなかった。いつそ病気を云い

立てにして今度の芝居を休んでしまおうと思っていた。

「でも、休んじや困るでしょう、この暮にさしかかって……」

「なに、どうにかなるさ」と、紋作は誇るように笑った。「芝居を一度や二度休んだって、まさかに雑煮が祝えないほどのこともあるまい」

「そりやあそうかも知れないわ。根岸の叔母さんが付いているから」と、お浜は口唇くちびるをそらして皮肉らしく云った。

紋作が根岸の叔母をたずねて、ときどきに小遣いを貰ってくることをお浜は知っていた。しかしその叔母というのがなんだか怪しいものであった。お浜がいくら詮議しても、紋作が正直にその叔母の住所も身分も明かさないのでみると、どんな叔母さんだか

判つたものではないと彼女はふだんから疑つていた。きょうもふと云い出したその忌味いやみを、相手は一向通じないように聞きながしているのです、若いお浜の嫉妬心はむらむらと渦巻いておこつた。

「ねえ、紋作さん。そうでしょう。おまえさんには根岸のいい叔母さんが付いているからでしょう。芝居に行かなくつても、この家うちにいなくつても、ちつとも困らないでしょう」

「そういう気楽な身分と見えるかしら。まあ、それでもいいのさ」と、紋作はやはり相手にしようとはしなかつた。

なんだか馬鹿扱いにされているようで、お浜はいよいよ口惜くやしくなつた。かれは膝を突っかけて又何か云い出そうとする時に、下から母のお直の呼ぶ声がきこえた。

「お浜や。紋作さんのところへお客様」

来客と聞いて、お浜もよんどころなく立ち上がって、階子はしごをあがって来る三十四五歳の芸人を迎えた。かれは紋作の兄弟子あにでしの紋七という男であつた。

「お浜さん。いつも化粧やっしていやはるな。初日まえで忙がしいやろ」

笑いながら挨拶して、紋七は長火鉢のまえに坐つた。お浜が遠慮して起たつたあとで、彼はにこやかに云い出した。

「気分はどうや。えろう悪いか」

かれは病氣見舞に來たのであつた。冠蔵と紋作との不和を知つている彼は、紋作がきのうから病氣を云い立てにして稽古にはい

らないのを疑つて、よそながらその様子を見とどけに来たのであつた。来てみると、果たしてさのみの容態でもないらしいので、彼は紋作に意見した。たとい冠蔵と不和であろうとも、それがために芝居を怠つては座元にも濟まない。自分のためにもならない。信州の旅興行には自分は一座していなかつたから、どつちが理か非かよくは判らないが、ともかくも仲間同士が背中合わせになつているのはどつちのためにも悪い。冠蔵とは仲直りさせるように私がうまく扱つてやるから、きようは我慢をして稽古にはいれ。まあ、なんにも云わずにこれから一緒に行けと、苦勞人の紋七は噓んでふくめるように云い聞かせた。

ふだんからいろいろの世話になつてゐる兄弟子が、こうしてわ

ざわざ足を運んで来て、親切に意見をしてくれるのである。その厚意に対しても、紋作は強情を張っているわけには行かなくなつた。もともとさしたる病気でもないのに、結局かれは紋七の意見にしたがつて、すぐに支度をして稽古にはいることになつた。ふたりはお浜親子に見送られて小間物屋の店を出た。

楽屋へはいつて、紋作はみんなと一緒に稽古にかかつた。兄弟子が横眼でじろじろ視ているので、彼はきしよく気色のわるいのを我慢して冠蔵の師直と無事に打ち合わせをすませた。六段目までの稽古が済んで、もう討ち入りまでは用がないと、あとへ引きさがつて煙草をすっていると、うしろから自分の腰を強く蹴つて通るものがあった。楽屋がせまいので、大勢の人のうしろを通るのは窮

屈に相違ないが、あまりに強く蹴られて紋作は勃然むっとした。

「誰だい」

振り返ってみると、それは衣裳をあつかっている定吉という者で、年はもう四十五六の、顔に薄あばたのある兎欠唇みつくちの男であった。かれはお浜の通っている衣裳屋の職人で、きょうも衣裳の聞き合わせのために楽屋へ来ているのであった。

「どうも済まねえ。なにしろ、この通り繡眼児めじろのおしくらだからね」と、定吉は鼻で笑いながら云った。

この挨拶の仕方が面白くないのと、故意に自分を強く蹴ったように思われたのと、冠蔵に対する不快を今までこらえていた八つあたりとで、紋作は素直に承知しなかった。

「こみ合っているならこみ合っているように、気をつけて通れ、むやみに人を蹴飛ばす奴があるものか。楽屋に馬を飼って置きやあしねえ」

「馬とはなんだ。手前こそ馬と鹿とがつるみ合っていることを知らねえか」

相手も喧嘩腰であるので、紋作はいよいよ堪忍がならなかつた。ふた言三言いい合つて、かれは煙管をとつて起ち上がろうとするのを、そばにいる者どもに押えられた。

「ほんまの三段目や」

ひとりが云つたので、みんなも笑つた。定吉は兎欠脣を食いしめながら、紋作を憎さげに睨んで出て行つた。

稽古の終った頃には冬の日はまだ暮れ切っていた。紋七は冠蔵になんと話したか知らないが、稽古が済んでから紋作を誘って、三人づれで池の端の小料理屋へゆくことになった。紋七はここで二人を和解させようという下ごころであつた。酒のあいだに彼はうまく二人を扱つたので、冠蔵もしまいには機嫌よく笑い出した。紋作も渋い顔をしてはいられなくなつた。赤堀水右衛門と石井兵助とをめでたく和解させて、紋七も先ず安心した間もなく、なにかの話から糸を引いて、いつかの人形の噂がまた繰り出された。「おい、紋作。あの人形はほんとうに斬り合つたのか」と、冠蔵は笑いながら訊きいた。

「嘘じゃあない。たしかに見た」

「じゃあ、まあ、ほんとうにして置くかな」と、冠蔵はまた笑つた。

それが又、紋作には面白くなかつた。今の冠蔵の口ぶりによると、かれは飽くまでも人形の不思議を信用しないのである。彼は飽くまでもこつちが故意に彼の人形を傷つけたように認めているらしい。紋作は嘲るように云つた。

「ほんとうにして置くも置かないもない。おれが確かに見とどけたんだから」

「見とどけた。むむ、寝ぼけ眼まなこでか」

「寝惚け眼でも猿まなこでも、おれが見たと云つたら確かに見たんだ。人形にたましいのはいるというのは無いことじゃない」と、

紋作はいきまいた。

「そりやあ人間が上手に使えばこそだ。なんの、木偶でくの坊がひとりで動くものか」

「ええ、そういう貴様こそ木偶の坊だ」

双方がだんだんに云い募ってくるので、紋七も持て余した。

「また三段目か、もうええ、もうええ、今更そんなことを云うてもあかんこつちや。木偶に魂があつても無のうてもかまわん。魂

かえす反魂はんこんこう香、名画の力もあるならば……」

大きな声で唄いながら、彼はあははははと高く笑い出した。

喧嘩の出ばなを挫くじかれて、二人もだまって苦笑にがわらいをした。それ

で人形問題は立ち消えになったが、席はおのずと白らけて来て、

談話も今までのように弾まなかつた。紋七が折角の心づくしも仇あだになつて、三人はなんだか気まずいような顔をして別れることになつた。

四ツ（午後十時）すこし前に紋作と冠蔵の二人はここを出た。ふたりともに可なりに酔つていた。紋七はあとに残つて今夜の勘定をして、それから店の帳場へ寄つて、稼業柄だけに愛嬌ばなしを二つ三つして、おかみさんや女中たちを笑わせているところへ、頬かむりをした一人の男が店口へついと歩いて来た。

「紋作はこつちに来ていますかえ」

「たつた今お帰りになりましたよ」と、女中のひとりが答えた。それを十分聞かないで、男は消えるように出て行つた。それか

ら又すこししやべつて、店では提灯を貸してやろうと云うのを断
 わつて、紋七もほろよい機嫌でここを出ると、上野の山にお押し懸
 かつている暗い空には星一つみえなかつた。不しのばず忍の大きな池は
 水あかりにぼんやりと薄く光つて、弁天堂の微かな灯が見果ても
 ない広い闇のなかに黄いろく浮かんでいた。寒そうな雁かりの声も何
 処かできこえた。

「えろう寒うなつた」

酔いも急にさめたように、紋七は首をすくめながら池の端の闇
 をたどつてゆくと、向うから足早に駈けて来て彼に突きあたつた
 者があつた。あぶなく倒れそうになつたのを踏みこらえて、また
 二、三間歩いてゆくと、今度はかれの足がつかずいたものがあつ

た。それがどうも人間らしいので、紋七も不思議に思つて、五段目の勘平のような身ぶりで暗がりを探つてみると、かれの手に触れたのは確かに人間であつた。しかもぬるぬるとした生なまあたたかい血のようなものを掴つかんだので、かれは思わずきやつと声をあげた。

三

紋七が発見したのは男二人の死体であつた。ひとりには紋作で、左の脇腹を刃物でえぐられていた。他のひとりは冠蔵で、左の耳の下を斬られ、左の胸を突かれ、まだそのほかにも幾カ所の疵きずを

負っていた。

式かたの通りに検視がすんで、死体はそれぞれに引き渡されたが、その下手人については二様の意見があらわれた。紋七や一座の者どもの申し立てによつて考えると、和解の酒盛りが却かえつて喧嘩のまき直しになつて、酔っている二人は帰り途中で格闘を演じ、結局相討ちになつたのであろうというのが、まず正当の判断であるらしく思われた。しかし死人の手にはいずれも刃物らしい物を握んでいなかった。それかと思うようなものも其の場には落ちていなかった。それが疑いの種となつて、二人はやはり他人に殺害されたのであろうという説がおこつた。喧嘩の相討ちならば仔細はないが、ほかに下手人があるとすれば、人間ふたりを殺したという

重罪人の詮議は嚴重でなければならぬ。半七はすぐにその探索にかかった。

その晩、料理屋の門かどぐち口へ来て、紋作はいるかと訊きいた男が先ず第一の嫌疑者であつたが、頼かむりをしていたので人相も年頃もわからない。すぐに出て行つてしまつたので、夜目では風俗も判らない。殆どなんの手がかりも無いので、さすがの半七も眼のつけどころに困つた。しかし冠蔵はもう三十に近い男で、家には女房もある、子供もある。紋作は若い独ひとりもの身者で、のんきに飛びあつている。芸人ふたりが殺されたといえ、その原因はおそらく色恋であろう。どの道、これは年のわかい独身者の紋作の方から調べ出すのが近道であるらしく思われたので、半七はその明

くる日の午過ぎに先ず紋作の家をたずねた。

小間物屋の二階には紋七を始めとして一座のものが五、六人あつまっていた。紋作と冠蔵との葬式が一度に落ち合うので、こっちの葬式を先ずあしたの朝にして、更に冠蔵の葬式をその日の夕方に出すとのことであつた。

ほかにも近所の人たちが四、五人来ていた。娘のお浜は眼を泣き腫^はらしながら茶や菓子^はの世話などをしていた。半七はお浜を二階から呼びおろして小声で訊^きいた。

「おい。あの二階の隅のほうに坐っている薄あばたの兔^{みつくち}欠唇の男は衣裳屋の職人だろう。名はなんとかいったね」

「定さん、定吉というんです」と、お浜は答えた。

紋作と定吉とが楽屋で喧嘩したことを知っている半七は、また訊いた。

「あの定という奴は、年甲斐もなしにお前になにか戯からかったことでもありやあしねえか」

蒼ざめた顔を少し紅くしてお浜はだまっていた。

「え、そうだろう。おまえに小遣いでもくれたことがあるだろう」
「ええ。白粉でも買えと云って、一朱くれたことが二度あります」

「紋作のところへ女でもたずねて来るようなことはねえか」

男はいろいろの人が来るので、一々かぞえ尽くされないが、女でここの家へたずねて来たものは一人もないとお浜は云った。

それでも半七に釣り出されて、かれは根岸の叔母さんのことを

話した。紋作は自分の叔母だと云っているが、それがどうも胡乱である。そこから時々男の使がくると、お浜は妬ねたましそうに話した。

「よし。あの定という野郎をここへ呼んでくれ」

お浜に呼ばれて降りて来た兎欠脣の定吉は、すぐに近所の自身番へ連れてゆかれた。半七は頭ごなしに叱り付けた。

「馬鹿野郎。いい年をしやあがつて何だ。孫のような小阿魔こあまに眼じりを下げて、あげくの果てに飛んでもねえ刃物三昧をしやあがつて……。途方もねえ色気ちげえだ。人間の胴っ腹へ庖丁を突っ込んだ以上は、鮪りょうを料理つたのとはちつとわけが違うぞ。さあ、恐れ入って白状しろ」

「親分。違います、違います」と、定吉はあわてて叫んだ。「憚りながらお眼違いです。わたくしが紋作を殺したなんて飛んでもねえことです」

「嘘をつけ。池の端の料理屋の門かどぐち口から、紋作はいるかと声をかけたのは手前だろう」

「違います、違います」と、彼はまた叫んだ。「そりやあ私じゃありません。十露盤そろばん絞りの手拭をかぶった若い野郎です」

「てめえはそれをどうして知っている」

定吉は少しゆき詰まった。かれは自分の冤罪むじつを叫ぶために、飛んでもない事をうっかり口走ってしまったので、今さら後悔しても追っ付かなかった。かれは半七にその尻っぽを捉まえられて、

とうとう恐れ入って白状した。

半七の想像通り、かれは自分の店へ手伝いにくるお浜のあどけない姿に眼をつけて、ときどきに小遣いなどをやって手なずけようとしていたが、お浜には紋作というものが付いているので、かれは兎欠唇の男などに眼もくれなかつた。定吉はそれを忌々しく思っているうちに、その日は楽屋で紋作と衝突した。ふだんから彼に対する憎悪にくしみが一度に発して、定吉はまさかに彼を殺すほどの料簡もなかつたが、せめてその顔に疵でも付けてやろうと思つて、料理屋の門口かどぐちに忍んで、その帰るのを待っていると、十露盤絞りの手拭をかぶつた若い男がおなじくその門口にうろうろしていた。こつちでじろじろ視れば、向うでもじろじろ視る。な

んだか^{ぐあい}工合が悪いので、定吉は一旦そこを立ち去つて、山下の屋台店で^{かんざけ}爛酒をのんで、いい加減の刻限を見はからつて又引つ返してくると、たつた今そこで人殺しがあつたという騒ぎであつた。^{すね}脛に疵もつ彼はなんだか急に怖くなつて、とんだ^{まきぞえ}連坐を食つてはならないと^{そうそう}忽々に逃げて歸つた。

「親分。まつたくその通りで、嘘も^{いっわ}詐りもございません。お察しください」

かれの白状は嘘でもないらしかった。

「十露盤絞りをかぶつていたのは若い野郎だな。どんな^{なり}装をしていた」

「^{ふたこ}双子の半纏を着ていました」

唯それだけのことでは、怪しい男の身もとを探り出すのはむづかしかつた。双子の半纏をきて十露盤しぼりの手拭をかぶつた男は、そのころ江戸じゆうに眼につく程にたくさんあつた。半七はいろいろな定吉を詮議したが、どうしてもその以上の特徴を発見することは出来なかつた。

工夫くふうに詰まつて、半七は更に紋七をよび出して調べた。紋作には叔母があるかと訊きくと、紋七は有ると答えた。ほかの者には隠していたが、兄弟子の自分には曾かつて話したことがある。それは紋作が末の叔母で、十六の年から或る旗本の大家たいけへ妾奉公に上がつていたが、今から七年ほど前にその主人が死んだので、根岸しもの下屋敷の方へ隠居することになった。本来ならば主人の死去と同時に

に永ながの暇いとまともなるべき筈であるが、かれの腹から跡取りの若殿を生んでいるので、妾とはいえ当主の生母である以上、屋敷の方でも、かれを疎略に扱うことは出来なかつた。かれは下屋敷に移されて何不足なく暮らしていた。

物堅い武家に多年奉公していた叔母は、自分の甥に芸人のあることを秘かくしていた。ことに自分の生みの子が当主となつたので、猶更それを世間に知られることを憚はばつて、表向きは音信不通にすかごしていたが、さすがは叔母甥の人情で、時々にとつと紋作をよび寄せて、幾らかの小遣いなどを恵んでくれた。紋作もいい叔母をもつたのを喜んで、ときどきには自分の方からも押し付けの無心に行った。しかし叔母から堅く口止めをされているので、かれ

は叔母の身分も居どころも決して人には洩らさなかつた。

これで紋作と叔母との関係はわかつたが、その下屋敷は根岸の方角とばかりで、屋敷の名は紋七も知らないと言つた。その上には詮議のしようもないので、半七はひと先ず紋七を帰してやつた。定吉も叱られただけで、主人の家へ歸された。

紋作の葬式は、あくる朝の五ツ半（午前九時）に小間物屋の店を出た。ともかくも芸人であるだけに、相当の会葬者がその時刻の前から店先へあつまっている、大きい霰あられがその頭の上にはらはらと降つた。半七も子分の庄太を連れて、その群れにまじつていた。

「ごめんなさい」

霰のなかをくぐつて一人の若い男が急いで来た。かれはお浜の母を呼び出して何かささやくと、お直は更に紋七を呼んで来た。男はやはり小声で紋七と何か応対して、袱紗ふくさにつつんだ目録包もくろくみらしいものを渡すと、紋七はしきりに辞儀をして、かれを奥へ連れて行つた。

「親分」

袂をひかれて半七はふり返ると、兎欠脣みつくちの定吉がうしろに立つていた。

「今来た男、あれがどうも十露盤絞りらしゆうござんすよ。顔にどこか見覚えがあります」

「そうか」

半七はすぐに紋七をよび出して訊くと、いま来た男はかの根岸の叔母の使で、紋作の香こうでん奠として金五両をとどけて来たのだと云った。紋七が彼に逢うのはきようが初めてであるが、これまでも叔母の使で時々ここに来たことがあるらしいとの事であった。

「あの男も見送りに行くのかえ」

「いや、ここで御焼香だけして帰ると云うていました」

云ううちにかの男は出て来た。彼はあたりの人に気を置くようにきよろきよろと見廻しながら、紋七やお浜親子に挨拶してそうそ忽ちう々に出て行った。半七はすぐに子分を呼んだ。

「やい、庄太。あの男のあとをつけれ」

葬式の出る頃に霰はやんだ。紋作の寺は小梅の奥で、半七も会葬者と一緒にとこまで送ってゆくと、寺の門内には笠を深くした一人の若い侍が忍びやかにたたずんでいて、この葬列の到着するのを待ち受けているらしかった。

四

紋作の初七日の速夜たいやが来た。今夜は小間物屋の二階で型ばかりの法事を営むことになって、兄弟子の紋七は昼間からその世話焼きに来ていた。涙のまだ乾かないお浜は、母と共にたすき襷がけで働いていると、その店さきへ半七がぶらりと来た。

「おれは御法事に呼ばれて来たわけじゃあねえが、これはまあ御仏前に供えてくれ」と、かれは菓子の折を出した。「そこで、今夜は紋七も来るんだろうね」

「はい。もうさつきから来ています」と、お浜は云った。

「そりゃあ都合がいい」

案内されて二階へあがると、小さい机の上には位牌が飾られて、線香のうすい煙りのなかに燈明の灯がまたたきもせずに小さくともっていた。紋七は数珠じゆずを手にかけて其の前に坐っていたが、半七を見てすぐに立って来た。

「親分さん。この間はいろいろお世話になりました。今夜は仏の速夜でござりますすに因よつて、まあ型ばかりの仏事を営んでやろう

かと存じて居ります」

「後々のことまでよく気をつけてやりなさる。御奇特のことだ、ごきどく 仏もさぞ喜んでいるだろう。さて其の仏のまえでお前さんに少し話したいことがある。ここの娘もつながる縁らしいから、おふくろと一緒にここへ呼んでもいいかね」

「はい。どうぞ」

お直とお浜とは襷をはずして二階へあがつて来た。半七は三人を自分のまえに列べてしずかに云い出した。

「もう済んでしまったことで、今更どうにもしようがねえようなもんだが、紋作がどうして死んだか、冠蔵が誰に殺されたか、その仔細がわからねえじゃあ、おめえ達もいつまでも心持がよくあ

るめえと思う。そこできようはそれを話しに来たんだから、そのつもりで聴いてくれ。ねえ、紋七さん。あの紋作は誰が殺したと
思いなさる」

「そりやあ判りまへん、ちつとも判りまへん」

「おれも最初は見当が付かなかつたが、この頃になつてようよう判つた。紋作は誰に殺されたのでもねえ。自分で死んだのだ」

「まあ」と、お浜とお直は顔を見あわせた。紋七も呆氣あつけにとられたように眼をみはつた。

「しかし冠蔵を殺して、自分も死んだのだ」と、半七は説明した。
「誰のかんがえも同じことで、仲の悪い紋作と冠蔵とが喧嘩の果てにあんなことになつたんだらうとは推量したが、二人ともに刃

物を持っていねえ。そこらにも刃物は落ちていねえ。そこで他人に疑いがかかって、おれも最初は衣裳屋の定吉に眼をつけたが、その見当は狂ってしまった。その晩、料理屋の門かどぐち口から紋作を訊きいた男、それが怪しいと思つたが、これもやつぱり外はずれてしまつた。しかし手がかりはそれから付いた。その男は植木屋で、紋作の叔母さんの下屋敷へ親の代から出入りをしている。その因縁で、叔母さんから頼まれて時々紋作のところへ使に来ていたんだ。あの晩も叔母さんの使で、年の暮の小づかいを幾らかここへ届けに来ると、紋作は稽古に行つた留守だという。その足で楽屋をたずねて行くと、紋作はここにももういないで、三人づれで池の端の料理屋へ行つたらしいという。それからまた引つ返して池の端

へ行つたが、御屋敷の内証の使ということが腹にあるので、なるべく当人の出て来るのを待つてこつそり手渡しをしようと思つていたが、相手はなかなか出て来そうもないので、待ちくたびれて近所の蕎麦屋へ行つて、寒さ凌ぎに熱い蕎麦をすすり込んでまた引つ返して来ると、もう夜はよほど更ふけている。思い切つて念のために帳場へ声をかけると、紋作は帰つたという。もう一度この家まで引つ返して来ると、やっぱりまだ帰らないという。使も根こんが尽きてそのまま帰つてしまつたという訳だ」

「そうです、そうです。あの晩は紋作さんを訪ねてお使が二度来ました」と、お直はうなずいた。

「それはまあそれでいいんだが、当人の紋作は冠蔵と一緒に料理

屋を出て、どっちも酔っている勢いで途中でまた喧嘩を押つ始めた。今度は誰も止める者がないので、喧嘩はいよいよ大きくなって、あわや腕うでずくになろうとするところへ、提灯をさげた一人の侍が通つた。くらやみで何か大きな声をして云い合っている者があるのだ。侍も思わず提灯をさし付けると、喧嘩の片相手は紋作だ。その侍は紋作の叔母さんの屋敷に奉公している黒崎半次郎という男で、下屋敷へもたびたび使に行くことがあるので、紋作とも顔を識しっている。それが丁度そこへ来合わせたのがいよいよ間違いを大きくする基もとで、もう逆上のぼせている紋作はその侍の顔をみると、黒崎さんどうぞ拝借と云いながら、だしぬけにその腰にさしていた脇差を引っこ抜いて、相手の冠蔵に斬つてかかった。そ

の黒崎という侍も吉原帰りで酔っている上に、あんまりだしぬけで呆氣あつけに取られていると、紋作は滅茶苦茶に相手を斬つて突いて殺してしまった。黒崎はいよいよ驚いて止めようとする、紋作ももう覚悟したのだろう。相手がよろけながら捉える手を振り払つて、今度は自分の脇腹へ突つ込んでしまったので、黒崎も途方にくれた。これが相当の年配の者ならば又なんとか分別もあつたろうが、年は若いし、おまけに吉原帰りであるから、武士たる者が自分の腰の物を人に奪われたとあつては申し訳が立たないので、あわててその脇差をひつたくつて、提灯を吹き消して一目散に逃げ出した。しかしそのままにはしておかれないので、あくる日すぐの下屋敷へ行つて、紋作の叔母さんに内証でそのことを打ち明

けると、叔母さんも驚いたがどうもしようがない。だんだん様子を探らせると、冠蔵も死んでいる、紋作も死んでいる。喧嘩の相手が両成敗になった以上は、猶更しようがないと諦めて、いつも
の植木屋に云い付けて、そつと香奠を持たせてよこした。黒崎は
自分にも落度があるので、蔭ながらその葬式を見送りに来た。と
いうわけで、何もかもすつかり判つたろう。おれがこれだけのこ
とを突き留めたのは、送葬とむらいの日に子分の庄太の奴が植木屋のあ
とを尾つけて行つて、その居どころを確かに見きわめて来たので、
おれがあとから乗り込んで行つて、奴を嚇かしてひと通りのこと
を吐かせた上で、また出直して行つてその黒崎という侍にも逢つ
た。侍は正直にみんな打ち明けて、屋敷の恥、自分の恥、何事も

口外してくれるなど手をさげて頼むから、おれも承知して帰つて来たんだ。さあ、こう判つて見りやあ誰も怨むこともあるめえ。

こうして仏の位牌のまえで俺が云うんだから嘘はねえ」

この長い話をしてしまつて、半七は新らしい位牌のまえに線香を供えた。

「お話はまあこれぎりなんですがね」と、半七老人はひと息ついて云つた。「もう一つ不思議なことは、紋作と冠蔵が一度に居なくなつたので、芝居の方では急に代り役をこしらえて、いよいよ十二月の初めから初日を出すと、三段目の幕が今明くという時に、師直と判官の首が一度にころりと落ちたそうです。冠蔵と紋作の

執念が残っているのか、人形にも魂があるのか、みんなも思わず慄然ぞっとしたそうですが、興行中は別に変ったことも無くて、大入りのうちにめでたく千秋楽になりました。兎欠脣の定吉という奴も、そのあくる年の正月にやっぱり酒の上で喧嘩をして、相手に傷を付けたので、吟味中に牢死しました。これも何かの因縁かも知れませんか」

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（三）」光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年5月20日初版1刷発行

1997（平成9）年5月15日11刷発行

入力：網迫

校正：藤田禎宏

2000年9月7日公開

2004年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

半七捕物帳

人形使い

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 岡本綺堂
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>